『國民新報』1939年7月30日

[主張]　腦と腹の力[[1]](#footnote-1)　　―休暇休日の新しい價値―

　のをきしてとなつた。ととにみのないである、にみのあらうがない。やだつてのらくらのであるべきではない。それはのであるりにのであるべきである。そもそもはにするであり、はにをびまして、へのとへの

のひをたにするためにはるべきであるべきである。はだ。

　ののはりにもととにしてる。でのも、でのもとしてとにられてつた。をにするならば、ととはとのをすにまるにくてとだけがけてきいとなるであらう。とはとのことであつて、とはとのことである。とののてないとはでしかありず、ければになるものである。とのないインテリのを々はに[[2]](#footnote-2)せけられてるではないか。

　にしはりたる[[3]](#footnote-3)に、『ニヒヲヒテノヲニセントスルタルメテク[、]タルダシ[。]シテソノ[、]ニリテノニアリ』とあるのはをれとのにして『レヲビヲンジ』とひしは、ののこととしる。のとのとあつてこそ『ルヲハズ、フヲラズノヲシヲメヲリ、ノヲシテノヲク』することがるとのかとしる。

　一のためにとととをとして、それにありくとしてととをぶようではのになることはない。にのをしてとをってこそ、そののとがにを云ふのである。

　さて、このとのこそはのとなるものであり、これはとしてのをびふことによつてなさるゝものであるがにやをばにりてらるべきではなからうか。ににくなつたにいてこのの一なるをずることゝふ。

1. 単行本ではタイトルが「胸と腹の力」となり、本文でも「腦」が「胸」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 単行本では「所在」が「所々」に代わっている。意味的にはこちらが正しい。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 1939年5月22日勅語。1941年7月に文部省から刊行された『臣民の道』に収録。 [↑](#footnote-ref-3)